

高知県における酒文化と酒造業について

～「飲む」から「楽しむ」ための方策～

1120356 甲藤 久典

高知工科大学マネジメント学部

1 研究の動機

私は、お酒の場でいろいろな人達と知り合い、みんなでわいわいと楽しめることからお酒が好きになった。しかし、その一方で最近の若者のアルコール離れが目立つようになっているのも事実である。

私は、若者のアルコール離れの要因のひとつに、酒は「飲むもの」であって、「楽しむもの」という感覚がない人が多いこともあげられると思う。そのためにも高知県のユニークな酒文化を知ってもらうことでお酒をより楽しんでもらいたいと考えた。ひいては酒文化を知った人がそれを伝えることで、さらなるファンが増えていくと信じている。

そこで本研究では、まず高知県の酒文化について、多くの文献・パンフレット等から整理・紹介する。次に、全国に日本酒製造業者は 800 社あり、四国地方では 65 社、うち高知県は 19 社だが、高知県にある酒造業 19 社（1 社休造中）の概要をまとめ、誰が作っているのか、どういう銘柄があって、どんな商品が人気なのかを調査する。つづいて高知県の酒造業の状況をよりわかりやすくするために、日本酒消費量 1 位の新潟県と高知県の酒造りや酒の特徴やこだわりなどを比較していく。比較により、一層高知県の酒造業について理解することができる考えた。

私自身、大学で地域活性化について授業やインターンシップ通じて学んだ。そのときに酒造業の発展を軸に高知県の経済活性化に繋がりたいと考えようになった。また私は卒業後居酒屋チェーン

店に就職する。そのこともあって老若男女、とくにアルコール離れが年々増えてきている若者にお酒の楽しさを伝えていくためにも、本研究を通して、高知県のお酒の歴史と酒文化を知ることが重要と感じたのであった。

2 若者のアルコール離れ

そもそもアルコール離れの原因として、次の 4 点が考えられる。1つ目は、アルコールというのはそもそも、飲みなれるまでは、会社の集まりや学生同士の集まりなど“付き合い”で、仕方なく飲むものだと思われていることである。2つ目は、アルコール飲料の質そのものが落ちているのではないかという懸念である。3つ目は、ゲーム機やインターネットやケータイなどの新しい娯楽に客を奪われたことや少子化による酒の飲料人口の減少が考えられる。4つ目は、今の若者は、昔の若者に比べて、ただ単純に今を楽しむのが苦手なのではないかとも考えられる。お酒を飲む時間が無駄時間であると考える人が増えたのではないかと考えている。

3 高知県の「酒文化」

高知県には酒の席を楽しくさせてくれる独特の「酒文化」がある。例えば、箸拳（はしけん）、酒杯（べくはい）、菊の花がある。箸拳とは、酒席での代表的な遊びの一つであり、二人で対戦を行い、袖元に隠して差し出されたお互いの箸の合計数を当てるという「ゲーム」である。そのゲームに負

けたほうはお酒を飲む決まり（罰杯）となっている。次に可杯とは、伝統的な宴会遊びで、サイコロ（コマ）のようなものを振り、出た目に指示された杯を使って飲むという楽しく単純なものであるが、杯の底がアンバランスなものや穴が空いているものもあり、飲み干すまで置くことができなくなっている。最後に菊の花とは、たくさんの杯を裏返しにして、その一つに菊の花をかくしておく。順番に杯を反していき、菊の花が入っていたら“当たり”である。当たった人は、それまでに空いた杯に酒が注がれ、そのすべての杯を飲み干さなければならない、人によっては恐ろしい宴会遊びである。

4 高知県の酒造業

ここでは、高知県の酒造史を概説し、酒造業者の設立や主な銘柄等について説明する。高知県の酒造業者を以下にあげておく。株式会社アリスワ（文佳人）・酔鯨酒造株式会社（酔鯨）・松尾酒造株式会社（松翁）・株式会社無手無冠（無手無冠）・土佐鶴酒造株式会社（土佐鶴）・有限会社仙頭酒造場（しらぎく）・藤娘酒造株式会社（藤娘）・有限会社西岡酒造店（雪柳）・有限会社南酒造場（玉の井）・有限会社有光酒造場（玉川）・土佐酒造株式会社（桂月）・亀泉酒造株式会社（亀泉）・有限会社濱川商店（濱の鶴）・文本酒造株式会社（桃太郎）・司牡丹酒造株式会社（司牡丹）・高木酒造株式会社（豊乃梅）・高知酒造株式会社（花の友、灘嵐）・菊水酒造合資会社（菊水）・東洋酒造株式会社（東洋城）である。

5 新潟県の酒造業との違い

高知県の酒造業全体を“盛り上げて”いくためにも、日本酒消費量第1位の新潟県のそれについて学んでいく必要があるのではないかと考えた。高知県と新潟県の酒造業者や県民の酒との関わり

あいについて比べてみた結果、新潟県の方がより県民と酒との「距離」が近いものであることがわかった。そこで、高知県も新潟県のように、高知県の酒文化に関するアカデミーを開講したり、お酒の知識や飲み方を広めるイベント活動などをもっと行ったりしてもいいのではないかと考える。そうすることで若者のアルコール離れを少しでも減らすことができ、酒造業もさかんになり、長い目で見れば高知県の活性化にも繋がると考える。なお、両県の酒の特徴はどちらも淡麗辛口である。

6 結論

この論文で、高知県の酒文化についてまとめ、高知県の酒造史を調査・検討した。そのなかで酒造業者の酒造りの大変さや難しさを学ぶこともできた。酒造業者の日々の努力があるからこそ、そして高知のユニークな酒文化があるからこそ、おいしいお酒を飲んでいる事ができるということを頭に置き、感謝を込めてお酒を楽しむつもりである。

参考文献

- 土佐史談会編・刊 [1998] 『土佐史談』 二〇九号、「土佐の産業史」特集号。
- 土佐史談会編・刊 [2007] 『土佐史談』 二三六号。
- 池上和夫 [1989] 「明治期の酒税政策」『社会経済史学』 第五十五卷第二号。
- 高知県酒造組合連合会 [1981] 『高知県酒造史 第一集』。
- 高知県酒造組合連合会 [1981] 『高知県酒造史 第二集』。
- 清遠幸男 [1991] 『高知県の工業』 高知市文化振興事業団
- 木部克彦 [2010] 『高知の逆襲-混迷日本を救う「なんちゃじゃないきに」！』 彩流社。